

梨福岡二県四十余戸<sup>一</sup>、大正二年四月入<sup>リ</sup>、小利別<sup>ニ</sup>、法華村<sup>一</sup>、率先<sup>シテ</sup>、振<sup>フ</sup>、開墾之斧<sup>ニ</sup>、併<sup>セテ</sup>、創<sup>シ</sup>、一字<sup>一</sup>、策<sup>ニ</sup>、勵<sup>シテ</sup>、本化<sup>ノ</sup>、信行<sup>一</sup>、所作<sup>ノ</sup>、仏事<sup>ニ</sup>、未<sup>キ</sup>、暫<sup>クモ</sup>、廢<sup>セ</sup>、矣<sup>一</sup>、往昔無人<sup>ノ</sup>、未開地<sup>ハ</sup>、今日<sup>ニ</sup>、県民大挙<sup>シテ</sup>、生産<sup>ス</sup>、可<sup>シ</sup>、謂<sup>フ</sup>、大聖人之徳<sup>ニ</sup>、業<sup>レ</sup>、於<sup>レ</sup>、是<sup>ニ</sup>、乎<sup>ニ</sup>、村民<sup>ノ</sup>、有志<sup>ニ</sup>、顯<sup>ニ</sup>、彰<sup>ス</sup>、遺徳<sup>一</sup>、以<sup>テ</sup>、申<sup>ニ</sup>、報<sup>ラ</sup>、恩<sup>一</sup>、欲<sup>シテ</sup>、伝<sup>フ</sup>、後昆<sup>ニ</sup>、而<sup>ニ</sup>、茲<sup>ニ</sup>、勤<sup>ム</sup>、之<sup>ヲ</sup>。

大光山妙龍寺六世道民、伊藤啓龍日秀撰、東邦長谷川讓書

と記されている。となりには、歴代上人の墓標と、時代の趨勢<sup>うよせ</sup>と共に衰退していった前啓寺本堂が、日宗の方向を望む位置に建ち、しかし、庫裡は崩壊し、本堂は朽ちかけている状態である。

### 三、日蓮宗教移民の歴史的社会的背景

久 住 謙 是

(現代宗教研究所調査主任)

一

日蓮宗移民、法華村の成立と現状を、前二章で、追究してきた。どのように移住して、開拓を進めていったか、事実を明らかにしてきた。

日蓮宗が進めた開教事業としての初めての試み、法華村の創設を知るためには、その歴史的社会的背景の理解によ

って、正しく認識されるものである。概略ではあるが、その一端を記しておくこととする。

北海道の開拓は、十八世紀末の江戸幕府による蝦夷地支配の政策と経営から始まる。その動機は、ロシアの南下に対応した国防上の必要と資源供給地、経済的理由による開拓志向といつてよい。

しかも、道南に限られ、漁業資源の供給が中心で、農業を必要とされながら、寒冷地農業技術が開発されていなかったため、海岸地帯にとどまっていた。

本格的な北海道開拓は、明治政府の樹立、近代を待たなければならなかった。

明治二年（一八六九）、蝦夷を北海道とよび、開拓使とよぶ省に相当する役所が設置された。北海道における開拓が、政策上具体化し、事実上、開拓行政が発効したことになった。昭和二十七年（一九五二）、北海道総合開発計画がスタートするまで、実に八十三年間北海道は、開拓行政が中心で、近代から現代に至るまで開拓の歴史であったといわれる所以である。

原野・原生林の自然の状態から、自然を開拓・克服して人間の居住する新しい地域社会づくりへの斧が入れたのは、まさしく近代に入ってから本格化したのである。

政策の試行錯誤、国家や世界情勢、資本経済の進行などにより、その時々において、紆余曲折がみられたものの、開拓史から始まった開拓殖民は、近代を一貫して進めた国家的課題であった。その結果、北海道住民の大部分が、この一世紀の間、全国の府県から集った移民、あるいはその子孫だということである。

開拓に必要なのは、何よりも労働力であり、本州からの移民に頼らざるを得なかったのである。

最初は浮浪人が多く、次いで、維新の変革で禄を失った士族が主力であった。明治八年（一八七五）屯田兵の入植が始まり、開拓の先駆を担うこととなった。

明治維新の政治改革は、封建制度から資本主義への社会・経済的変革を意味し、地租改正事業・西南戦争・紙幣整理などに伴うインフレ、さらにデフレに見舞われた経済的激動によって、多くの農民が土地を失い、小作農となり、離農する者が続出した。

一方、ロシアは、大規模なシベリア・樺太の開発を開始し、明治二十四年（一八九一）にはシベリア鉄道に着工するなど緊張状態が強まり、北方の危機として捉えられた。

この大量の生活手段を失った農民と国防上緊急を要する内的・外的問題を吸収してゆく場、これが北海道開拓と位置づけられている。

明治二十年代に入ると、北海道庁は、直接本州の離農者、貧窮の農民対象に、積極的に、北海道移住をよびかける姿勢を示した。すでに、『北海道農業手引草』『北海道移住案内』『北海道移住問答』などが公刊され、民間からは、筑波篤司著『拓殖指導北海道実況』、村上元長著『移住案内北門之鍵』などが出版され、北海道移住を誘う案内書が続出した<sup>(1)</sup>。

また、一般の雑誌なども、北海道移住を進める宣伝の一翼を担っていた。たとえば、『文書雑誌』明治二十六年発行の中に、「北海道殖民之歌」を載せている。当時の北海道開拓をすすめる状況が示されているので煩を厭わず紹介することにする。

#### 北海道殖民之歌

第一 往けよ探れよ北海道 津軽の海はただ七里 一跨ぎして渡るべし 北緯四十度垣ならず 打越すこといと易し 東西二百と八十里 南北百里と余りあり 十一ヶ国百余島幅員六千九百あり 沿海六百五十里余と 四十の大湖二十の沼 百有余流の川河は 凡て水産饒多なり 原野は九十余町 三分は樹林二分は除け 五分は

泥炭地なれども 悉く是れ肥沃なり 髓骨賚き山脈は 礦物蔵す倉庫なり 毛髪に似たる森林は 材木卸す本店なり

第二 移り住へよ北海道 人は少なく土地ひろく 世に知らざる遺利あるは 二千五百年來狩り尽し 子孫代々鋤かへし 残る限なくあらしたる 五畿七道の比にあらず よし少しくは寒くとも 欧州諸邦にくらべなば頗る暖地好気候 決して厭ひ嫌ふべき 寒地と思ひあやまらず 移れ諸人はげみなば 音に聞へし臘虎獅 名にも響ける寄鯨 評判高き漁業より 世に喧しき礦山や 製造業に至るまで 凡て君等の手によりて 日々に発達進歩せん 是れぞ世の爲国の爲め オ勤めまをす次第なり<sup>(2)</sup>。(第三は略す)

一番で、「往けよ探れよ北海道」は、決して遠いところではなく、広大な土地に、水産業・農林業ともに大いなる宝庫であること、二番で、このような土地を君らの手で「発達進歩」させるべきで、「世の爲国の爲」大義名分をうたい、「オ勤めまをす次第なり」と、移住を勧誘して結んでいる。

明治四十五年(一九二二)、日蓮宗団體で移住した、当時八歳であつた生存者が憶えている北海道移住を勧める言葉に、「切り倒した根つ株の上に立つて、四方にパラパラ種を蒔けば、勞せずして秋に麦・そば・豆が獲れる」と聞かされ、一戸当り、約束通り開墾すれば、五町歩の畑を無償で与えるということであつた<sup>(3)</sup>。

本州の狭い耕地を小作する農民にとつて、夢のような新天地と想像されたに違いない。

浄土真宗本願寺は、北海道開拓にいち早く着手、教勢の伸展をみた。明治三年(一八七〇)新門主現如が渡道した、全国の末寺を動員して農民に移住を奨励するために作つた「人をして蝦夷に往くを樂ましむる四箇条」の「醉歌」といわれる歌は、正しく宗教移民、開拓推奨歌といふべきものであろう。

「第一」トトサンカカサンユカシャンセ、ウマイ物モ胆斗アル、オイシイ酒モ胆斗アル。エゾエゾエゾエゾエジャナ

イカ」<sup>(4)</sup>と、十二番からなり、歌に託して移民を進めたのが、最も早いものである。

明治二十年代は、こうした国策の推進と社会背景、移民の奨励が相俟って、士族から農民へと転換して移民が急増していった。

明治二十五年（一八九二）、北海道庁は、貸付地予定存置の制度を設け、府県知事の認可を受けた三十名以上の団体で、団体員一人につき五町歩、一定期間内に開墾すると無償で付与することとなった。明治三十年に二十戸、同四十年には、十戸と団体員の数の制限が緩和された。団体移民は、最初から自作農をめざし、何よりも、開墾すれば五町歩の農地が保証される条件が魅力であった。また、同郷・風俗・習慣、さらに宗教を同じくする者が団結して団体を作ったことが、困難な開拓を進める大きな原動力となって開拓が伸展した。

次頁の図で見られるように、開拓は漁業関係で、先ず海岸沿いから始まり、農耕地の開墾が内陸へと漸次進められた。肥沃な平坦地の農地化が奥地へと行われ、明治十九年（一八八六）以降、同四十一年（一九〇八）の間に、貸付面積は、百四十二万五千町歩を数え、道内における農耕適地の大部分が処分された<sup>(5)</sup>。

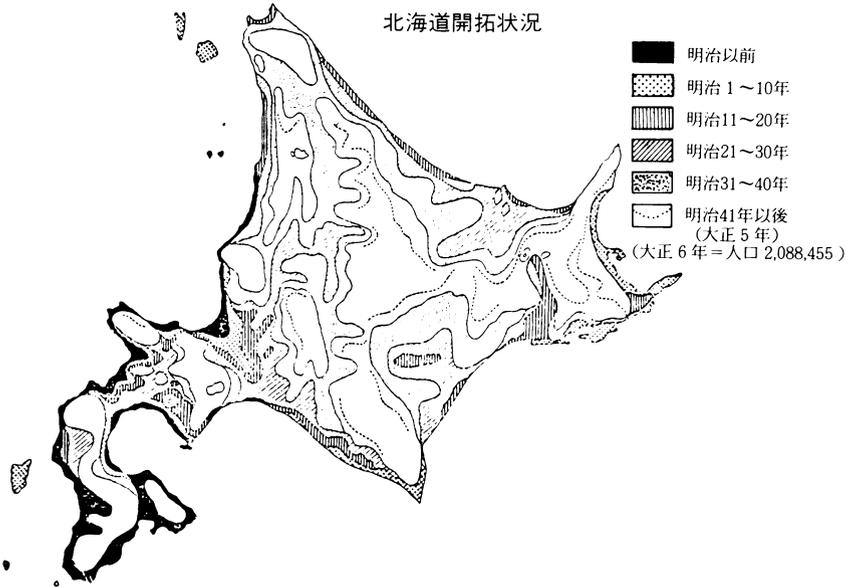
明治四十四年（一九一）には、専業農家十一万戸、兼業二万六千戸、合わせると十五万を越え、耕地は五十八万町歩に達した<sup>(6)</sup>。

明治三十三年を契機に、生産高は漁業と農業が逆転して、開拓農業が中心となった。

明治二年（一八六八）以降、大正十一年（一九二二）までに、移住者は五十六万戸、二百四万に達した。とくに、日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦を含む、前後に多数の移住者が特徴として認められ、戦争と社会の関わりが数値に現われている。

また、さきにふれた社会的経済的変動によって、生活手段を失った農民の行先が、都会か北海道か二者択一を迫ら

## 北海道開拓状況



北海道の開拓（井黒弥太郎「北海道開拓図」による）

れ、北海道移住を決めた富山県砺波地方の例のごとく(7)、東北・北陸地方を主力にした移住団体のほか、災害などによって移住した団体も少なくない。樺戸郡に入植した奈良県十津川団体および、虻田郡と小利別（日宗）に入植した山梨団体は、水害によるもの、足尾銅山鉍毒事件で郷里を追われ常呂郡に入った栃木団体、濃尾大地震により上川郡・石狩郡に入った愛知団体、関東大地震で道東に入った罹災移民団、兵庫県淡路から追われて静内郡に入った法華宗（仏立講）団体など、生活手段を奪われ、故郷を捨てて移住せざるをえなかった団体が多く含まれていること、さらに、宗教移民（後述する）が各宗派によって行われたのである。

勿論、一方的な移住者に終始したのではなく、開拓の困難を克服できず、脱落して帰還した人々も多くいたことも事実であった。

北海道人口の著しい増加は、石狩地方から後志地方、空知・上川地方へ、さらに天塩・十勝・釧路・網走地方へと進み、道央・道東へと開拓が伸びたことを意味している。とくに、内陸部の開拓の前進は、鉄道布設によって急伸した。

道東にかぎって、開拓入植状況をみれば、図でみられるように、明治初年から十年までの間、釧路・厚岸・浜中・根室から羅臼に至る沿岸、同十一年から二十年までの間、網走・斜里・紋別など、オホーツク海沿岸に進み、太平洋岸の広尾・大津も開かれた。大津を遡った帯広に依田勉三が組織した「晩成社」十三戸が初めて入植、厚岸の内陸部も開拓が進められた。同二十一年から三十年までの間、帯広周辺・網走・美幌・北見周辺、および太平洋・オホーツク沿岸から内陸部へと開拓、同三十一年から四十年までの間、十勝平野牛首別に百五十二戸移住成功させた二宮親徳の「興復社」、陸別の斗満別に牧場を開いた関寛が入植した。今日みられる耕作適地の大部分が開拓された。同四十一年以後、さらに開拓が進められたが、条件の劣るところで、全体的にはわずかの面積であった。小利別日蓮宗移民はこの時期に入植したのである。

こうしてみると、道東開拓は、漁業に依拠した海岸地帯、太平洋、オホーツク海の順に主要漁港が開かれた。釧路・厚岸・根室、次いで網走・紋別と町が形成され、次に農業開拓が進んで、帯広が先駆的役割をはたし、鉄道・道路の開通に促され内陸部の原野開拓が急速に拡大、農地が開墾されていったが、当然、北海道全体からみれば、道東の開拓は後発地域であったことは、地理的条件からして当然であった。

したがって、日蓮宗寺院の創立が町の形成と符合するように、認められる。太平洋沿岸漁港が最も早く、オホーツク沿岸、内陸部と順次、創立年代が移行しており、小利別法華村説教所(前啓寺)設立は、開拓進出から見れば、後期に属するものといえる。

## 二

北海道移民団体の中に、宗教移民があったことは、先述の通りである。

ここでは、各宗派の移民状況の一端を示し、日蓮宗団体が入植した当時、日蓮宗以外の宗教移民がどのように行われたか、見てみることにする。

まず、キリスト教を指導精神に開拓を進めた、荻伏の「赤心社」があげられる。新天地北海道をピューリタンのアメリカ移住になぞらえて、理想の開拓をめざし、明治十四年（一八八二）、広島・兵庫県から募集した第一回五十四戸の移民を引率して、浦河町荻伏に入植した。

暴風雪・干ばつ・イナゴなどの被害になやまされながら、すぐれた指導力で新しい農業経営を多角的に行い成功させた。赤心社は、募集した移民のすべてがキリスト教徒であったのではなく、キリスト教が移民の条件であったわけではない。しかし、赤心社はプロテスタントが多く、その信仰、精神的意義を強調して開拓地に独特な開拓村を築いた。

赤心社に三年おかれて、静内町豊畑に入った兵庫団体は、淡路の日蓮系本門仏立講の集団である。

仏立講の信者たちは、郷里にあつて、少数派ゆえに宗教的迫害を受けた。ほとんどが小作人であったが、小作地を取り上げられて生きてゆく基盤を失い、困窮のどん底にあつた。

講中の指導者渡辺伊平を中心に、北海道移住を決意した五十三戸は、家財を処分して旅費をつくり、明治十八年（一八八五）豊畑に移住した。郷里を捨て、決死の覚悟で、新天地北海道をめざした動機の点では、アメリカへ上陸したメイフラワー号のピューリタン移民に似ていた。迫害のない新天地で、生存できるぎりぎりのところで、文字通り刻苦精励、近くの淡路洲本から移住した稲田家中や新冠御料牧場などの好意を受けながら、政府の支援物資を断固として謝絶、脱落者もださずに開拓を成功させた。

そのほか、記録として認められる宗教移民は、管見ではあるが、明治二十四年（一八九二）、瀬棚郡へ入ったキリス

ト教徒の開拓団、同二十六年、高知県から樺戸郡に入ったキリスト教移民団、同三十二年、幌延町に愛知県長応寺を移し、信徒をひきいて法華宗農場が開かれた。布教拠点地をつくる計画で開設したが、負債のため失敗に終わった。同四十二年、岡山県から紋別郡に入った金光教団体、大正五年、滋賀県から河東郡に入った天理教団体などを数えることができる<sup>(8)</sup>。

明治二十五年（一八九二）出版の『北海道宗教植民論』は、前述の赤心社と本門仏立講の成功をあげ、宗教的精神にうらづけられた団結こそ、困難を克服することができるとして、開拓魂を宗教的精神に求めたものであった。

生産手段を失い余儀なく渡道した草莽層の中で、宗教的団結、使命観にもとづく宗教団体の成功が、開拓推進の上から大きな評価が与えられた。宗教植民論が宗教移民を誘引、定着させる一つの契機となったであろう。

当時、日蓮宗北海道開教は、開拓地布教所を拠点に活動を展開していた。身延山の巡回布教や、有力寺院の支援はあったものの、基本的には教師個人の布教に負う伝道が主体であった。

そんな中で、『北海道宗教植民論』が出版された翌年、北海道紀行を行い、宗教事情を实見してきた江馬桂秀師は、「日宗新報」<sup>(9)</sup>に所論を寄せ、日蓮宗による「宗教植民」をよびかけたことは注目される。佐野前助総監が実施断行をした二十年前のことである。すでに、北海道開教は、宗教移民が、一つの潮流として早くから存在したことは、これら移民団によって知ることができるのである。

北海道は、松前藩時代の道南地域はおくとして、その他の全域に及んだ開教は、近代に入った明治以後であったことは、既述の通りである。

今日、北海道の宗教、とくに仏教各宗派にかぎってみた場合、全道二千九百九十四カ寺の内、真宗大谷派四百八十八カ寺、曹洞宗四百三十三カ寺が最も多く、日蓮宗は二百一カ寺にすぎない<sup>(10)</sup>。いかに上記二宗派が北海道にすぐれて

教勢を拡大してきたか、知っておく必要があらう。

ここでは、宗教移民にかぎって、真宗大谷派の北海道開教をスケッチすると、安政四年（一八五七）「蝦夷地濁川村五五万坪の開拓を始める」「同六年、蝦夷地桔梗野五六万坪の開拓を始める」<sup>(1)</sup>、と見え、明治以前すでに蝦夷地開拓を進めていた。しかし、今日の開教の基盤となったのは、明治三年（一八七〇）の新門主現如上人が渡道し、東本願寺道路の開削、札幌御坊（札幌別院）の開創であらう。現如は、宗門信徒の北海道移民をよびかけ、いち早く、北海道宗教移民を、宗門開教事業として推進したのである。

今日、道内に浸透布教した背景は、こうした本願寺枢要な人物の北海道入りを契機に、たとえ、それが維新前後の政治的配慮、新政府に対する協力の証しであつたとしても、大きく開教を展開する礎になつたことは言うまでもない。宗教移民を積極的に進め、その定着こそ、開教への足がかりを作る拠点となつていつたことは言うまでもないことである。江馬桂秀師が、明治二十年代、現地を視察し、宗門の実態を憂え、宗門の開教事業として、日蓮宗宗教移民を提唱したのは、現如渡道から二十年後であり、移民の実施は四十年後になるのである。

明治四十五年（一九一三）、日蓮宗は、佐野前助を宗務總監に迎え、はじめて日蓮宗団体を組織して、陸別町小利別に宗教移民を行った。川島醇北海道長官と個人的知己の関係があつたといわれるが、事實は詳かではない。出身地、福岡県より入植家族を募集するなど、佐野前助のこの事業にかけた熱意と行動力は、評価されなければならないだろう。

しかし、残念ながら宗門に待望された指導者を得るには時を失つていたのでなからうか。明治四十年代、すでに大部分の農耕適地は開拓の鋤が入れられて、劣悪の内陸丘陵地に限られていたのである。

ここで、福岡県にさきだつて入植した山梨団体、現在の市川大門町黒沢地区出身者について、その入植を決意させ

た背景を窺ってみることにする。

すでに記したように、明治四十年山梨県下は、空前といわれた大水害に襲われ、多数の死者と家を失い、田畑を流出して生活の糧を失った人々が多数にのぼった<sup>(10)</sup>。同四十三年には、再び大水害に遭い生きる方途を失い、都市へ出るか北海道に移住するか、選択を迫まれる状況にあった。

明治四十一年と翌年にわたり、北海道俱知安村に四百七戸が大挙して移住したのは、こうした大水害のため郷里を離れざるを得なかった人びとであった。日蓮宗団体に加わった黒沢地区の宮沢寺・妙学寺の檀家も例外ではなかった。富士川に面した低地で、洪水のたびに水害を蒙り、明治四十年の大水害では、田畑を流され併せて昔から生業とした富士川船運の船方も、鉄道の敷設交通の発達で前途に不安を抱かせた。

自然の災害と社会の変動の不安の中に置かれ、すでに出発した北海道移住者達の情報に触発され、われわれもという意識が働いたことであろう。そして、宮沢寺で修行した旧知の僧北海道開教師広瀬啓宣の勧誘、日蓮宗団体移民募集の話は、渡りに船を得た思いであったと考えられる。

以上、日蓮宗宗教移民の背景の一端を管見ながら概観した。結論的に要略すると、近代という政治的、経済的体制が変革した中で、激動する社会に最も弱い農民を主とする生活諸手段を失った人々の創出・災害など直接の動機が働いたこと、近代に北海道開拓殖民が国策として推進されたこと、きびしい環境下ながら、未開の新天地として希望を抱かせたこと、移住者対象の宗教伝道とともに、宗教団体の移住が各宗派によって積極的に進められ、明治四十年代、有力宗派はすでに宗教移民を行っていたこと、宗門内に、すでに宗教移民が提言されていたことなどがあげられる。

佐野前助という宗務総監を迎えて、日蓮宗は宗教移民の実現をみたのであるが、近代の日蓮宗伝道史の中で正しく位置づけられると共に、その成立と現状をさらに考究することによって、伝道宗門のあり方、将来の展望に多くの示

唆を与えるであろうことを信じて疑わない。

注

- (1) 海保嶺夫 『幕藩制国家と北海道』(三一書房)三二二頁
- (2) 右同三二二頁
- (3) 現宗研調査取材聴取
- (4) 海保嶺夫 『幕藩制国家と北海道』三二〇頁参照
- (5) 歴史シリーズ 『北海道の歴史』一七四頁
- (6) 榎本守恵 『北海道の歴史』二九二頁
- (7) 『砺波市史』七三七頁
- (8) 高倉新一郎・関秀志 『北海道の風土と歴史』一五一頁
- (9) 「日宗新報」四八二号
- (10) 『全日本仏教寺院名鑑』昭和五十一年度版
- (11) 『真宗年表』一六三頁
- (12) 歴史シリーズ 『山梨県の歴史』二四三頁